

期待に沿わなかったネット選挙

ネットを使った選挙運動が解禁されたが、期待された効果がなかったと各メディアが報道している。ネットの選挙情報にアクセスした人の割合が数%に満たず、しかも、大半が一度だけしか訪問していない。候補者のツイッターのフォロー数も少ない。出口調査では、ネット情報を参考にしたという者がほとんどいない。したがって、ネット選挙が候補者選びには影響を与えなかった。選挙への関心も呼ばなかった。期待された投票率の向上はなかったと、さもびつくりしたように解説している。

ネット上で関心を引いた唯一の例外は、東京選挙区で当選したタレントの山本太郎氏と、緑の党から立候補したミュージシャンの三宅

最近の的外れネット論

洋平氏であり、アクセス数、回数とも抜群で、ネットが有効活用されたとしている。

こんなことは初めからわかっていたのだが、今さら、ニュースとして取り扱われているところを見ると、新聞などのメディアにとっては今回の結果は予期しなかったことなのかもしれない。

ネットは、すべての問題を解決してくれる魔法の杖ではない。政治や選挙に関心のない者がどうしてわざわざ政党や候補者のサイトを訪問するのだろうか。ネットは積極的に情報を求めている者にとっては素晴らしい道具であるが、関心の無いものにとってはまったく無価値だ。

ネットが政治を変えたという外国の例を見て、その背景や理由も分析せずに、日本でもネット選挙を解禁すれば政治がすぐ変わることを期待するのは、いかにも浅はかである。日本には高度に発達したテレビや新聞の政治報道があり、選挙民には十分すぎるほどの情報が与えられている。ネットでなければ得られないような情報は今のところほとんど無い。さらに個人献金の慣行がないから、ネットを通じた資金集めは簡単には根付かない。米国

や韓国の大統領選挙で演じた。この二つのネットの大きな役割が日本では期待できないことは、少し考えればわかることだ。

的外れの三類型

今回のネット選挙解禁に限らず、本コラムでたびたび指摘したようにICT（情報通信技術）に関する報道や世の中の通説は的外れが多い。これらの的外れ事例を大別すると次のように類型化できると思う。

① 社会的影響を過大評価するケース

ICTの効用を過大に評価して、世の中はICTによって変革すると唱える例である。今回のネット選挙解禁に関する事前報道もこの類に属するものであると思う。以下のような例が典型的な事例である。

●チュニジアでは、Facebookなどに接続できる環境がなかったにもかかわらず、Facebookがジャスミン革命を引き起こしたと解説。

●パソコンの普及率や識字率が極めて低いエジプトでネットが革命を起こしたと解説し、ほとんどの携帯がまだ第二世代のGSMであるにもかかわらず、スマホでFacebookをや

っているような映像を見せる。

●Facebookの利用者が世界で何十億人もいて、これからのマーケティングはSNSが中心になると解説。

② 「新」技術が絶大な力を持っていると信じるケース

昔から存在する技術も新しいネーミングのため「新」技術と誤解して盛り上がり、大した技術でもないのに「新」技術であるがゆえにあたかも市場革命が起きるかのようになり、喧伝する事例である。

●スマホやクラウド・サービスは、相当前から製品やサービスが存在したが、ごく最近に出現した「新」技術で市場革命が起きたよう



「ネット依存」を過大に評価しすぎる？

に評価。

●スマート・テレビがこれからテレビ革命を起こすかのような解説や、スマホのあるアプリがすべての個人情報をも漏洩するかのようになり、解説。

③ 専門家の言を盲信として真に受けるケース

例えば、日本ICT産業衰退の理由として次のような専門家や当事者が唱えた説が蔓延したような事例である。いまだにこれらの説明を信じている者がいるが、疲弊の真の理由でなかったことは明白だ。

●携帯電話は世界標準に従わなかったから世界に進出できなかった。

●ガラパゴス化して独自に発達したから世界から取り残された。

●技術では日本がよほど進んでいる。

●高品質高機能なものは世界では売れない。

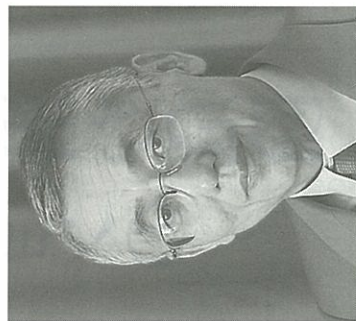
中高生のネット依存症の程度は？

さて、最近「ネット依存の中高生が五十万人超」という厚労省研究班の調査結果の報道が各紙やテレビを賑わした。実に高校生の九・四%がネット依存症に陥っており、ネット世界に閉じこもって日常生活や健康にも影響が見られるとのことである。NHKでは、ネット中毒者の具体的な症例や専門外来病院なども併せて紹介された。

大変由々しき状況であることは確かだが、報道を視聴すると、あたかも五十万人超の中高生が中毒症状に陥り人格形成に破綻をきたしているような印象を与える。しかし調査は、ギャンブル依存のスクリーニング・テストを元に八項目の質問を行い、このうち五つに当てはまると回答したケースをネットの「病的使用」と判定しているにすぎない。

家族との関係など思春期の少年少女にありがちな傾向にネットを意図的にからめて「ネット依存症」と決め付け、何もかもネットのせいにしてはいないだろうか。どうも前記①の過大評価の例に属するように思えてならない。

地理的・時間的の空間を越えてあらゆる情報を得ることのできるICTは人間を神に一步近づけたが、人類が手にしてからたった十数年しか経てない。過大に評価したり、専門家の言を真に受けることもある程度仕方がないことではあるが、もう少しまともな分析をしてもらいたいものである。



内海善雄(つみよしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンソーシアム」理事。IEEE名誉会員。